

スマートキッズ発達支援研究所便り

「きらっと」20号

2021年8月1日

研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズのあり方

個別重点型療育教室「Toto」から通過型生活介護施設「Hapy」まで

研究所員 福本 有紗、小島 花観

### スマートキッズの理念

「教育の力により、一人ひとりの可能性を最大限支援することによって、共生社会の実現に貢献します」

スマートキッズは、その理念に、だれもが暮らしやすい共生社会の実現というビジョンを明確に示しています。

集団療育のよさを生かしつつ、独自に開発した教材を使って、より専門的な個別療育教室「Toto」も、昨年からは始まりました。また、通過型生活介護施設「Hapy」事業も開始され、未就学の幼児期から成人まで「一貫した支援」が実現しました。このように、スマートキッズの連続性のある縦断的な支援体制のもと、だれもが安心して療育を受けられること、それは私たちの長年の念願でした。

プラス（小学生対象）やジュニア（中学生～高校生対象）と呼ばれる教室では、10名程度のお子様をスタッフ4～5名体制で支援する集団療育が通常スタイルです。学校から帰ってきた子どもたちは、笑顔で迎えるスタッフとあいさつをして、カバンをロッカーにしまい、手洗いやうがい、検温、連絡カードの提出、宿題をするというように、順を追って進めていきます。こうした生活の流れや所作も大切な成長のチャンスとして適切に支援しています。

宿題が終わると、個別支援計画に基づく個別課題として、微細運動や学習課題に取り組みます。微細運動とは、手や指を使った細かな動作です。これがスムーズにできると、日常生活や学習で必要となる様々な活動や作業がとても楽になります。微細運動の苦手なお子さんも多いのですが、かかわり方や支援の仕方、大きく発達するものです。楽しみながら楽しく取り組める教材と適切な声かけが決め手です。

個別課題が終わると、ソーシャルディスタンスを取りながら、おやつを一緒に食べ、異なる年齢の子どもと楽しく遊んで過ごします。そして、いよいよ集団療育として、一緒に工作を行ったり、運動したり、SSTをしたりなど、集団ならではの活動を行います。また、現在はコロナ渦でなかなか実施できませんが、公園や近くの博物館などの公共施設を訪ね、社会勉強を目的とした課外活動も実施しています。

「child」の複数形が「children」と全く変わるように、集団の子どもたちというのは、個で見せる面とは全く違う面を集団の中で見せてくれることがあります。集団ならではの楽しさがあるように、集団ゆえの大勢の中の1人という戸惑い、不安がついて回り、それがまわりまわってパニックという形で表出されることもあります。そのような戸惑いや不安を、言葉でうまく表出できず、泣いたり、物や人に当たったりすることで、自己表現をする場合もあります。そもそも負の感情を表出することは、とても難しいことです。特に、特性や年齢の異なる集団の中で、自分の気持ちや思いを言葉で表したり、状況を説明したりすることは、大人であっても難しい場合が多いものです。

そこで、子どもがパニックになった時、スタッフは、まずは落ち着かせ、「どのように表出するべきなのか」を子どもの理解度に沿って、視覚的に提示したり、声をかけて代弁したりしての支援を行います。学校でも放デイでもよくある光景

だと思えます。一方、集団の中で個人にフォーカスを当てて支援することには、限界もあります。このため、個別重点型の療育は、必然だといえます。集団療育のよさと個別療育のよさを併せ持つスマートキッズのよさがそこにあります。

子ども一人ひとりの可能性を引き出すことは、スマートキッズの指導員が、最も大切にしている理念であり、支援姿勢であり、支援指針です。この考えのもとに、個別重点型療育「Toto」は、未就学児から高校3年生までを対象としています。通所するお子さんたちの7割は、発達障害ですが、いわゆるグレーゾーンのお子さんの通所希望も多くいらっしゃいます。クラスで少し気になるお子さん、不登校のお子さん、保護者がお子さんの発達の気になることについて、支援をしてもらえ施設を探して来室するなど、様々なケースがあります。

スマートキッズでは、心理士や作業療法士をはじめとする専門家と教室のスタッフが協力して、子どもたち一人ひとりの発達の状況を丁寧にアセスメントし、一人ひとりの子どものニーズに応じた療育支援を提供できる強みがあります。たとえば、前述のような「負の感情の表出に難しさがある」場合、ソーシャルスキルトレーニングプログラム（SST）の中で、どのように言葉で表すとよいのか、じっくり考える時間が取れます。また、ロールプレイのような形で成功体験を積むことで、自己肯定感が高まり、集団の中でも、表出できるようになることが期待できます。

さて、スマートキッズのもう一つの強みは、発達段階ごとに、最適の支援プログラムを提供できることにあります。集団療育では、前述したように、小学生向け、中学高校向けの教室があります。それぞれの教室は、それぞれの発達段階に見合ったプログラムを用意しており、ジュニア教室では、就労、自立に向けた支援も行っています。

また、これまでは、学校段階の支援で止まり、高校を卒業した子どもたちがどのように成人し、社会生活を営むのかまでについては、療育支援が行き届いていない現状がありました。そこで、スマートキッズの長年の念願であった、成人向けの生活介護施設を創設した訳です。

通過型生活介護施設「Hapy」は、就労を目的にした生活介護施設です。「通過型」という名前がついているのは、次の進路に繋げる、自立に繋げるという目的に沿うための施設であることの決意表明でもあります。

「Hapy」では、就労施設で行うようなボールペンの組み立て、仕分けなどの練習を行うこともあれば、身体を動かしたり、コミュニケーションゲームで遊んだりすることとして、利用者の人間関係づくりを大切にしています。

大人は、仕事も余暇も楽しむことが、QOL を高めるうえで大切であり、人生をバランスよく楽しむには何が必要なのか、そのツールと一緒に探すのも支援員が大切にしている姿勢の一つです。

どの年代の、どのような特性の人を支援する場合でも、私たちが目指すことは、1人ひとりが、幸せな人生を歩むことです。そのために、専門性を高め、最良の支援をしようと努力しています。利用者の得手不得手、感情、価値観、それらを一つ一つ把握する努力を怠らず、常に理念に立ち返り、日々確認しながら支援を行っていきたくと思います。



♡ 小島 花観（こじま はなみ） 臨床心理士、公認心理師

発達障害などを抱えているお子さんの支援や、就労支援に関わり、子どもたちの個性や長所に寄り添った支援を目指しております。

♡ 福本 有紗（ふくもと ありさ） 臨床心理士、保育士、幼稚園教諭

保護者様の支援や連携にも力を入れて取り組み、子どもの持つ力を引き出しながら社会生活のスキルを提供できるよう頑張ります。